

は、実力もとトップクラスである。

勝ち負けを決する要因は飛び込み演技である以上、相手を意識することではないのである。自分の演技を意識することが技能を高めることであり競技力向上への最短の道である。と考える。そして勝つことを覚えて行く。勝つことを覚えて行くということは試合運びを覚えるということである。あくまでも自分自身の試合運びを・・・。それを知ってのうえで相手を意識するというのであれば何も問題はない。もし自分自身の「試合運び」がまったくないのであれば選手とは言えないし競技者でもない。たんなる参加者である。(話はずれるが小学校に木下勇飛という選手がいる。初めて全国大会に出場した3年の時、最初の種目を飛ぶ前にこれから飛ぼうとする総ての種目の動きを確認していた。そのことが良い悪いではなく、彼は彼なりに試合の流れを自分で作っていた。すごい選手だと感じた。今年、全国大会で8位に入賞した。)

そういう試合運びが完全にできたのがインターハイであった。1年前の富山での失敗をうまく利用することができた。「宮本もやればできるんだ」と感じた試合であった。この地元でのインターハイだけは私自身も、優勝宣言をしたのでより感慨深い試合となった。

実は大会1カ月前ぐらいに強化指導者会議があり、そのときにも板飛び込み、高飛び込みの2種目に優勝宣言をした。手首のこともあったので、余り練習をしていなかったのが現状で無理をすることができない状態であった。体操の山口先生の講演があり「残りの1カ月のトレーニングをどうするか」という内容であった。

「あと1カ月か」「さあ、どうやって練習しようか」という気になった。でも、あせりは全くなかった。なぜなら「来るなら来い状態」であったからだ。一日もはやく試合がしたい心境だった。

その後の練習は、1日に板も高も(高は前半は殆ど飛ばせなかった)1~2本回しであった。残り1カ月間は試合を想定して通告つきで行った。前半の1~2週間は静岡のY選手、岡山のK選手、茨

33K17

負けた



7月14日大会

負けた

試合直前

競技者としての
競技に全力

木のS選手などが宮本の前に次々に種目を決めて高得点を上げて行く。しかも、次に宮本が飛ぶ種目と同じ種目をである。宮本は得点は伸びないでどうしても勝てない状態。次の週、なかなか追い付くことができなかつた選手達と得点が以外と競っている。対等に勝負をしている状態。そして最後の週、宮本の得点が相手より勝っているという状態。宮本自身はいままでと変わらないが相手が失敗をしてしまうので点が伸びない。という身勝手な練習方法を行った。

まさに、敵なし状態のインターハイであった。本人が台の上で練習時と同じように首を回して普段どおりに動作が始まっていた。安心してみることができた試合であった。そして、もっと安心してみることができた競技運営であった。

大会直後、宮本の性格からしてうわつた気持ちになってはいないかと心配になったので電話で「これで終わった訳ではないので気を抜くな」と一言いっておいた。その後TVのインタビューで彼が「まだまだ試合が続きますので気が抜けません」と答えていたのを見て、いらん心配だった事を嬉しく感じた。・・・（しかしジュニア五輪では気が抜けていた。・・・まだまだ甘い。）

②国体の反省

《内容》4試合中3試合に優勝することができた。試合内容は少年男子はあまり良くなかつたが悪い仲でもミスをもっと少なくくい止め大きなミスをしなことに集中し他の選手がミスをして行く中である程度種目をまとめることができた。成年男子は飛び板で最終種目で大きなミスをしてしまったが、選手の試合運び、精神的な安定度は良く安心してみることができた。

《勝因》・悪いコンディションの中で調整がうまくいった。

・板踏みの感覚を試合開始直前（10分前）につかむことができた。

・強風の中で試合ができた。（3日目）